

福岡大空襲の悲劇を母の声で風化させない人

門田照子エッセイ集『ローランサンの橋』

鈴木 比佐雄

門田照子さんという詩人は稀有な才能を持った詩人である。そう認識したのは第一詩集『巡礼』の縮刷版（第三刷は二〇〇一年刊）を読み、そのCDを聞いてからだ。その大分弁で読まれた詩を聞きながら詩集にも目を通して行くと、それは文字で読んだだけでは決して分からない、高音の華やかさを残しつつ人生を見透すような格調高い響きが伝わってきた。門田さんの方言詩は、方言詩を含めた生活語詩などの朗読をしている詩人たちの中で、高く評価されてきた。また福岡市の幾つかの劇団がこの方言詩を原文のまま朗読する舞台を試みたという。この『巡礼』はこれからも様々な場所で朗読され続けるだろうと思われる。そのような愛読者と同じように私も時々この『巡礼』のCDを無性に聞きたくなる瞬間がある。それは目先のことに捉われて、自分を見失いそうになる時に、真に生きたものだけが語れる肉体を持った言葉を聞きたいと願うからだろう。門田さんの『巡礼』は、その意味で詩人として後世に残る詩篇であるだろう。その中から詩「流出」（第

三詩集『満酌』から第三刷に収録された詩）を引用してみる。

グラマンの機銃掃射浴びち

耕太郎が亡うなったんは

昭和二十年七月の末ん

茹だるごたる暑い日盛りじゃった

人い頼まれち 朝地ん駄まんて

切符買いに行つちよつたんが

あん空襲さい遭遇うなんち

村は ひっそり閑と静まり返つちよつた

じゃけんど 嘘言じ無うち

あん子は血い塗れじ横転つちよつち

取りついてん 揺さぶつてん もの言わん

何が可愛想えち 人間 腹ん切れち

はろた
腸こかし出し殺されるぐれえ

辛いこたあ無え

私(うち)はもう 無我(むが)夢中(むとう) 浴衣(ゆい)裂(さ)きちぎつち

あん子(こ)ん五(ご)体(たい) 繕(つくろ)うたんじや

小兵(こんめい)けんど働(はたら)き者の良(よ)え体格(ていこく)しちよつち

足(あし)ん先(ま)まで拭(ぬ)き上げち

着物(きもの)着(き)せ替(か)えたら

朝(あさ)間(ま)出(で)ち行(い)った時(とき)と (少しも)とつと変(か)らん

たあだ寝(ね)ちよるごとあつちなあ

翌(あ)けん朝(あ) 隣(あ)の辰(つ)つあんに頼(たの)うだ

急(い)拵(ぎ)えん棺(くわん)桶(はち)い納(な)めち リヤカーに積(た)んど

女子(おんな)供(こ)じ焼(や)き場(ば)さい曳(ひ)いち行(い)くに

呆(ぼろ)つとなつちしもうち誰(たれ)あれん泣(な)きもせん

つくねんと歩(あ)くだけじやつた

悔(く)しゆうて 情(ずつ)無(の)うて

腹(はら)ん底(ぞ)から涙(なみだ)んふき零(こぼ)れちきたんは

敗(ま)戦(せん)後(ご)んことじやつた

敵(てき)機(けい)い追(お)われち射(や)ち殺(ころ)されたつち

名(な)誉(よ)の戦(せん)死(し)にもならん

運(ふ)が悪(あく)かつたじや濟(い)まんはずじやに

誰(たれ)あれん知(し)らん顔(かほ)じや

私(うち)は 何(なん)年(ねん)経(へ)ってん あん戦(いくさ)んことは

死(し)んだ先(ま)まで恨(うら)うじ 恨(うら)み抜(ぬ)くんが

犬(いぬ)猫(ねこ)んごたる死(し)にぎまさせられた

あん子(こ)の供(こ)養(やう)じや ち思(おも)うちよるけんど

なあ 間(ま)違(ちが)うちよるじやろうかいのう

(「流出」全行)

この「流出」を読み聞いていると、戦争とは肉親の肉体が裂かれ内臓が「流出」して、くることが多いことを実感させてくれる。その戦争への恨みを消すことは絶対不可能であることが身に沁みてくる。門田さんはこのような方言を駆使しながら、戦争の悲劇を語り継いでいく母親の悲しみの詩を書き上げてきた。被災者五万六千名、焼失家屋一万二千六百戸以上、死者・行方不明者千四百四十名以上を出した福岡大空襲の当事者であった門田さんは、子や家族を亡くした母親たちの語り部になって書き記してきたのだらう。

今回の門田さんのエッセイ集『ローランサンの橋』は、そんな詩集『巡礼』を生み出した門田さんとその家族の歴史を記したものだ。五章に分かれた四十八編が収録されていて一章「水中を逃げる夢」(七編)は、亡くなった微かな父の記憶、戦前の暮らし、福岡大空襲の体験などを語っている。二章「ローランサンの橋」(十編)は、母の死と残された句集、戦後の祖父母と叔父達との暮らし、学生生活、就職、「ローランサンの橋」の上で結婚を決意するまでのことを語っている。三章「貧しさのすすめ」(九編)は、新婚・共稼ぎ時代、夫や子ども達のことなど新しい家族のことを語っている。四章「或る風景画」

(十三編)は、叔父達、祖父母、母、亡くなった夫のことなどを語っている。第五章「語り部のご褒美」(九編)は、故郷の福岡、姑の故郷の大分のこと、師と仰いだ二人の詩人高田敏子、岡部隆介のこと、戦争体験を語り継ぐことなどを記している。そんなエッセイを読み続けると、深い悲しみを秘めながらも、一人の感受性の強い少女の透き通った平和への願いが希望のように私の中に流れてくる。門田さんは戦争中に二歳で父を結核で亡くし、戦後まもなく母も十一歳の時に結核で亡くした。自分も福岡大空襲に遭遇し川に逃れて助かった。一人のか弱い少女の肩に日本の破滅的な出来事が圧倒的に襲いかかってきた。そんな過酷な境遇の中でも祖父母や叔父たちに育てられた門田さんは、時に悪戯をして怒られながらも、明るく懸命に生きてこられたことが、このエッセイ集に薫風のように語られている。このエッセイの特長の一つは門田さんが、福岡大空襲当時の十歳の少女の純粋な視線で当時を再現しようとしていることだ。原稿を読んで編集作業をしている間、宮崎駿のアニメの主人公の少女のような生き生きとした感性が多くの人びとを感動させると直観した。その生き方は門田さんの人生でありながらも、九州・福岡の戦前・戦中・戦後を貫き現在にまで続く生きた歴史を体現しているように私には感じられる。米国は一九四四年六月に中国・成都から爆撃機を発進させて北九州の八幡製鉄所を爆撃した。その後はマリ

アノ諸島から全国一八〇もの都市に空爆の計画を立てその多くは実行された。中国への侵略や重慶などの都市への爆撃への報復として、日本の軍事基地や軍需産業を爆撃するだけでなく、民間人の住む街全体を廃墟にして日本人を無差別に虐殺することに向かっていった。門田さんの福岡大空襲の体験を記したエッセイは、全国の空襲被害者たちの心情の代弁者としての役割を担っている。もちろん空襲体験だけでなく、親のいない夢みる少女が様々な経験をして、良き理解者となった夫と二人の子を育てていく。共働きする際に育児の手助けをしてくれた姑から学んだ大分弁が、後に門田さんしか成し得なかった大分弁の詩集『巡礼』を生み出していくのだ。そんな戦争の実相を記したり、泥臭い方言で人間の真実を伝えて芸術のことばに転化させたりする試みは、読者の心に生きる底力となる烈風を浴びせてくれる。

門田照子さんの名を初めて知ったのは、一九九五年前後に柳生じゅん子さんから詩誌「えん」が何冊か送られて今回のエッセイ集に出てくる「福岡大空襲」などのエッセイを読んだことだった。何か戦中・戦後の濃密な人間のドラマを書き記している女性詩人がいるという印象だった。「えん」があっけなく十一号で終刊になり、そのエッセイの続きを読むことがなかったが、柳生さんからは門田さんのエッセイが貴重な内容を記されている

て、残すべき価値があるということも聞いていた。門田さんと親しくなってきたきっかけは、二〇〇八年にコールサク社が企画・発行した『生活語詩二七六八集』の参加を呼びかけるために、門田さんに電話をしたことだった。門田さんは、一度聞いたら忘れられない心に残るきれいな声の持ち主だった。その声は決してアナウンサーのような訓練された美しさではなく、きつと飾ることのない率直な生き方をしてきたことが感じられる透き通った肉声だった。そんなきれいな声の持ち主の門田さんは、大分弁で現代社会の高速化やグルメ志向や環境破壊の問題点を指摘した詩「二十一世紀の紐」で参加してくれた。その大分弁の中で人間が引き起こした問題点を手加減しないで曝け出す温かい批評的な言葉に引き込まれた。また翌年の二〇〇九年に刊行した『大空襲三二〇人詩集』には福岡大空襲のことを記した詩「火炎忌」を寄稿してくれた。またその年の初夏に開かれた出版記念会にも福岡から上京されて参加して朗読もしてくれた。東洋大学で行ったその記念会には、東京に暮らす息子さんが門田さんに付き添って連れて来てくれた。門田さんは病気がちだが、一人で福岡から上京する行動的な人であることを私は知った。息子さんは大手広告代理店でコピーライターをしている。きつと母の良き理解者であり母の創作力を引き継いでいるのだろう。その時の朗読を聞いて私は、なぜ門田さんが詩やエッセイを書き続けている

るか、その語り部としての信念が理解できた気がした。そんな交流の中で私は門田さんにコールサク社社の「詩人のエッセイ」シリーズに入って、福岡大空襲のエッセイなどをまとめて欲しいと依頼した。その提案から数年が経ち、その間に最愛のご主人を亡くされて、門田さんも体調を崩されていた。しかしようやく今回の編集前の原稿が送られてきた時に、私は門田さんが自分の経験を含めて、二人の母や母の世代の戦争体験を語り続けることを生涯決して止めない覚悟だということを変更して痛感した。九州・福岡だけでなく全国の戦争体験を継承することを志す人びとや、報復の連鎖を止めて世界の空に空襲・空爆を禁止させようと構想する人びとに、ぜひこのエッセイ集を読んで欲しいと願っている。最後に門田さんの詩「火炎忌」を引用してこの小論を終えたい。

火炎忌

空襲の炎に追われた昭和二十年六月十九日夜
わたしは国民学校四年生だった
低空飛行のB 29の胴体が吐き出す焼夷弾は

連なり 流れ 飛び 落下し 火を噴く
人の住む街に 人の暮らしに 人の命の上に
灯火管制 防火用水 砂袋 鳶口 火叩き
小国民の銃後の守りを嘲る空からの火の手に
防空壕を這い出し 風下へ逃げる 走る
怒鳴り声 叫び声 泣き声 悲鳴
家族にはぐれ 群衆の後を火の粉に塗れ
引き潮の樋井川下流の橋の下になだれこむ

赤爛れた空からの轟音はきりもなく

油脂焼夷弾は川の面をめらめらと這い舐め

悪魔の翼に追われた人群れの修羅のざわめき

「南無妙法蓮華経」

「黙らんか非国民！」

「助けてつかあさい」

「畜生！馬鹿ったれ」

年寄りが喚く 赤ん坊が泣く 女が嗤う
人の恐怖が橋の下を埋め やがて静もる

いつものように陽は上り晴れた夜明け
町並みの燻る臭気の中を家へと走った
けれど わたしの家は無かった
辺り一面見通しのよくなった瓦礫の原
天に刺さった風呂屋の煙突一本

黒焦げの丸太になったK子ちゃんのお母さん
ほろ雑巾のように火傷をした隣のお婆ちゃん
爆風にやられて祖父の耳は聴こえない

五十五年間生き延びてきた無傷のわたし
振り向けば後ろに煤けた炎の道
忘れないで 忘れないで と
悲痛に歪んだ人影が走ってくる
あの日から失うものは もう何もない
消えてしまった故郷は戻らず 人は帰らず
わたしの戦後は終わらない
わたしの二十世紀は終わらない